

先月、二つの新聞に投稿しました。産経新聞の「朝晴れエッセー」と朝日新聞の「男のひといき」です。残念ながら両方とも不採用となりました。拙文あるいは時節に合わない、投稿が多く選に漏れた等いろんな要因があったと思うのですが、甘い期待もありました。このHP だったら原稿採否の決済は自分自身ですよ(当たり前!)。そこで二つをここでご紹介しました。楽しんでいただけたら嬉しいです。(写真はHP 用に入れました)

### 「朝晴れエッセー」 ロシアの「6月の花嫁」

ジューンブライド——もともとヨーロッパの習慣だが「6月の花嫁は幸せになれる」との伝えに日本でも夢見る女性もいるようだ。私は思うところがあって定年後に世界文学の旅を始めたが今でも鮮やかに思い出す光景がある。



大作の『罪と罰』『戦争と平和』の舞台を訪ねてロシアのサンクトペテルブルク、モスクワを訪れた際、行く先々で新婚カップルの初々しい場面に遭遇した。ロシアにはジューンブライドの慣習はないという。でも、初夏の太陽が輝き緑が最も美しい6月は新しい人生のスタートに最適なのだろう。1週間の滞在中に出会ったカップルは20組を超えた。彼らは仲間に取り囲まれて記念撮影をしていた。白いベールに純白のウェディングドレスの花嫁たちは木々の緑に映え輝くばかりに美しかった。私もその“撮影班”に加わった。おめでたい席。断わられるようなこともなかった。

「シャスリーヴァ！（お幸せに！）」。同行の通訳から教わったお祝いの言葉を投げかけると、ニコっとほほ笑んで応えてくれる花嫁もいた。

仲間たちが囁きたてた。「ゴーリカ！」「ゴーリカ！」。ロシア語で「苦（にが）い」との意味。つまり「苦いからもっと甘いところを見せてくれ！」との呼びかけだという。声がかかると、カップルはひしと抱き合い熱く長いキスを繰り返した。

体制の異なる国でも、幸せを求める若い男女、それを祝福する仲間の姿はどこも変わらない。少々お堅い文学作品の旅に思いがけずも心温まる光景をプレゼントしてくれたのだった。



トルストイの生家の博物館の庭園で



モスクワ大学前にある森の中で

## 朝日新聞「男のひといき」 夏野菜の手入れに忙しい

この時期は自家菜園の夏野菜の手入れが忙しい。自宅から徒歩10分、たった30平米ほどの借地の一区画だがトマト、キュウリ、ナス、スイカ、ピーマンが実り始め、カボチャ、ゴーヤ、インゲンの蔓が伸び、畑の隅では自然に生えてきたシソも元気いい。

忙しい主因はキュウリとスイカ。“まだ小さいからもう少し”と先端に花のついたキュウリを残して2日後に行くと10センチ以上も伸びている。あのコリコリとした瑞々しい新鮮な味は薄れてしまう。

スイカは毎朝の受粉作業だ。咲いた雌しべに摘み取った雄しべの花をそっと押しつける。受粉が成功するとビー玉くらいの果実はピンポン球から野球ボール、ソフトボールそしてバレーボールほどの大きさへとになっていく。

野菜の収穫が最盛期になると妻と二人では食べきれない。都内に住む子供や孫たちに送り、近隣の親しい人にもお裾分けしている。去年は笑顔いっぱいスイカにかぶりつく孫たちの写真も送ってきた。

畑を始めて10年余り。借地料、種苗、肥料、農具や資材などの出費を考えるとスーパーで買った方が安上がりかもしれない。でもコロナの三密とは無縁な畑で、降り注ぐ太陽のもと土に親しむ快い疲れと充実感、そして野菜が毎日生長していく喜びには代えられない。(写真は今年の畑のものですが今年もほとんど同じです)

